

事項	だいこんのキスジノミハムシに対するテフルトリン粒剤の効果的な土壌混和方法		
ねらい	だいこんのキスジノミハムシ ^{まきみぞ} に対し、播種時の土壌処理剤として最もよく使われているテフルトリン粒剤について、播溝処理の土壌混和方法を変えて防除効果を検討したところ、混和方法により防除効果が異なることが明らかになったので参考に供する。		
指導参考内容	だいこんのキスジノミハムシに対するテフルトリン粒剤の播種時播溝土壌混和は、種子と同程度の深さで浅く混和した方が、深く混和した場合より防除効果が安定し、根部被害を効果的に抑えることができる。		
期待される効果	キスジノミハムシの被害を防止し、だいこんの安定生産が図れる。		
利用上の注意事項	<p>1 本剤は、地上部に対して防除効果がないことから、茎葉散布を併用する。</p> <p>2 キスジノミハムシは、イヌガラシやスカシタゴボウなどのアブラナ科雑草にも寄生し発生源となることから、ほ場周辺の除草も併せて行う。</p> <p>3 本資料は平成28年1月18日現在の農薬登録内容に基づいて作成した。</p> <p>4 農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認して使用者の責任のもとに使用すること。 「農薬情報」(http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/) 「農薬登録情報検索システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm) また、短期暴露評価の導入により使用方法が変更された農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用すること。</p>		
問い合わせ先(電話番号)	野菜研究所 病虫部 (0176-53-7085)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成26～27年度 野菜研究所試験場試験成績概要集 北日本病害虫研究会報 第66号 北日本病害虫研究会報 第67号(投稿予定)		

【根拠となった主要な試験結果】

表1 だいこんのキスジノミハムシに対するテフルトリン粒剤の土壤混和方法の違いと防除効果
(平成26年 青森野菜研)

試験区	供試薬剤	土壤混和の方法	被害度 (播種後日数)					
			15日後 (7/22)	21日後 (7/28)	28日後 (8/4)	36日後 (8/12)	42日後 (8/18)	56日後 (9/1)
播溝浅	フォース 粒剤	手押し式播種機により浅く混和	0	0 (0)	1.7 (3)	48.3 (48)	65.0 (65)	95.8 (95)
播溝深		中耕ロータリーにより深く混和	0	0.8 (1)	17.5 (27)	57.5 (58)	86.7 (87)	99.2 (99)
無処理	—	—	0	55.8	63.9	100	100	100

- (注) 1 試験場所：上北郡六戸町犬落瀬 (野菜研露地圃場)、供試品種：貴宮
 2 処理月日：平成26年7月7日 (播種時)、発生状況：甚発生
 3 処理量・方法：フォース粒剤4kg/10a、播種時播溝土壤混和
 4 処理方法：播溝浅区は、播種直前に供試薬剤 4 kg/10aを播溝に筋状に散粒し、手押し式播種機をその上から押して、作条爪 (播溝深さ約 3 cmに調整) で浅く混和しながら播種した。
 播溝深区は、播種直前に供試薬剤 4 kg/10aを播溝に筋状に散粒し、その上を中耕ロータリー (歩行型トラクター 中耕幅約18cm、刃の回転直径約33cm) で耕起した後に、手押し式は種播機で播種した。
 5 () 内数値は対無処理比
 6 調査方法：各区から10本を抜き取り、根部の被害程度別調査を行い被害度を算出した。(農作物有害動植物発生予察事業調査実施基準)
 無：食痕なし、少：根部食害面積 0 < 1%、中：根部食害面積 2 ~ 4%、
 多：根部食害面積 5 ~ 10%、甚：根部食害面積 11% <
 被害度 = $\frac{\text{少の本数} + \text{中の本数} \times 2 + \text{多の本数} \times 3 + \text{甚の本数} \times 4}{\text{調査本数} \times 4}$

表2 だいこんのキスジノミハムシに対するテフルトリン粒剤の土壤混和方法の違いと防除効果
(平成27年 青森野菜研)

試験区	供試薬剤	土壤混和の方法	被害度 (播種後日数)				
			21日後 (7/24)	27日後 (7/30)	31日後 (8/3)	40日後 (8/12)	56日後 (8/28)
播溝浅	フォース 粒剤	手押し式播種機により浅く混和	0	1.1 (2)	11.1 (15)	43.3 (45)	73.3 (73)
播溝深		中耕ロータリーにより深く混和	0	2.2 (4)	18.9 (25)	40.0 (42)	76.7 (77)
無処理	—	—	12	58.9	75.6	95.6	100

- (注) 1 試験場所：上北郡六戸町犬落瀬 (野菜研究所露地圃場)、供試品種：夏つかさ旬
 2 処理月日：平成27年7月3日 (播種時)、発生状況：多発生
 3 処理量・方法：フォース粒剤4kg/10a、播種時播溝土壤混和
 4 処理方法：表1の(注)4の処理方法に同じ
 5 () 内数値は対無処理比
 6 調査方法：各区から10本を抜き取り、根部の被害程度別調査を行い被害度を算出した。(日本植部防疫協会の新農薬委託試験の調査基準)
 無：食痕なし、少：食痕がごくわずかに認められる、中：食痕やや目立つ。品質やや劣る、
 多：食痕が多い。品質劣る。
 被害度 = $\frac{\text{少の本数} + \text{中の本数} \times 2 + \text{多の本数} \times 3}{\text{調査本数} \times 3}$